

Fate/Grand Order ～巻き込まれた特異と少女たち～

コーラテートク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、人理修復の戦いにある青年が参加したら、というIFの物語である――

プリヤ要素多め？なので、注意してください

プリヤはいいぞ！

本当に不定期更新です（ーωー）

目次

1章 特異点F

第1話	1
第2話	4
第3話	6
第4話	9
第5話	11
第6話	13
第7話	16
第8話	19
第9話	21
第10話	23
第11話	25
第12話	28
第13話	32
第14話	35
第15話	37
第16話	39

1章 特異点F

第1話

《?? Side》

「——ここは、どこだ。」

燃え盛る街、人の気配が感じられないその場所に、一人の青年が立っていた。

辺りを見渡してみても、崩れたビルと焼けた地面くらいしか目に映らない。

「また、跳んだのか…。」

そう呟くと、青年はいつの間にか持っていた二振りの剣で背後にいたスケルトンを切り伏せる。

「何が起こってるんだ。ここは冬木、だよな？」

黒と白の双剣を持ち直し、跳ぶ寸前の光景を思い出そうとする。

——あの時いた場所も冬木だったが、こんな世界の終わりを体現したような状態にはなっていなかったはずだ。

改めて周囲を確認すると、見渡す限りの骨、骨、骨である。

「…とりあえず、こいつらを蹴散らして落ち着ける場所を探そう。」

そういうと、青年はスケルトンの大群に突っ込んでいった——

《カルデア Side》

「——はあっ！」

気合とともに、おおよそ人間の力では振り回すことなど出来そうもない大盾が振るわれ、スケルトンが吹き飛ばされる。

吹き飛ばしたスケルトンが動かなくなったことを確認し、軽く息を吐く。

「ふう…。戦闘終了です、マスター。」

「お疲れ様。やっぱりすごいね、マシユは。」

「い、いえ、センパイのサポートがあつてこそです。」

マシユと呼ばれた少女は、センパイと呼ばれた青年——
へ藤丸

立香〉の称賛に、謙虚に反応する。

どこか緩い雰囲気と思うところがあつたのか、同行しているもう一人の女性——〈オルガマリー・アナムスフィア〉が

「油断しないで、どこに敵が潜んでいるか分からないのよ?」

と不機嫌そうな顔で警戒を促す。

「そうですね、気を付けます。」

そう言つて正面に向き直つた瞬間——

黒い風が立香たちを薙ぎ払つた。

直撃はしなかつたものの、衝撃によりかなり後方まで飛ばされ、壁に背を打ち付ける。

「か、は…!?!」

一瞬息が詰まつたものの、痛みをこらえて先程までたつていた場所を見る。

「くつ、マスター、所長、無事ですか!?!」

マシユは何かと相対していた。一瞬たりとも目を逸らさず、黒い影を見据えている。

「だ、大丈夫!気絶してるけど所長も無事だ!」

——じゃらりと鎖が揺れる。ゆらゆらと体を揺らしながら、黒く染まつた影が立香たちを睨みつける。

「コロス…。」

「え?」

そんな言葉が聞こえたと同時に、マシユの体は宙を舞っていた。

勢いのままに吹き飛ばされるマシユの体を、間に割つて入る形で何とか受け止めることに成功する。

だが、吹き飛ばされたときに頭を打つたのか、ピクリとも動かない。

「マシユっ、しっかりしろマシユっ!」

今の最高戦力であるマシユがロクに反応すらできずに倒された。

この事実には、恐怖が心を支配しそうになる。

ここで全員死んでしまうのか、と諦めそうになる。

「…でも、今マシユを守るのは俺しかいないんだ!」

マシユは倒れ、所長も気絶している。

こんな状況で自分まで諦めてしまえば、間違はなく全員が死んでしまっただろう。

だから、

「絶対に、諦めてたまるかつ！」

動き出したソレに対し、負けてやるものかと心の底から叫んだ瞬間

飛んできた黒と白の剣が黒い影を貫いた。

第2話

「これで、終わりだ！」

青年が降り抜いた白黒の双剣が最後のスケルトンを叩き切った。

「やれやれ、まさかこんなところで100人(体)切りを達成するとは…。」

今現在、青年が倒したスケルトンの数は100を超えていた。

勢いよくスケルトンの群れに突っ込んだままでは良かったのだが、群れの数に100を超えることを悟った瞬間、

「なんじゃ…。」

と辟易としたものである。

まあ、己を鍛えてくれた師匠の口癖が出てしまっても仕方がないのである。

——仕方がないったら仕方がないのである。

何とかスケルトンを倒し切り、骨まみれの地面で軽く休んでいたのだが——

すぐ近くで、轟音が鳴り響いた。

「これは…。」

青年が感じたのは、スケルトンなどとは比べ物にならない魔力量である。

「間違いない、サーヴァントの魔力…！」

即座に気持ち切り替え、魔力が流れてくる方向へ走る。

警戒を最大に引き上げそれが目に映った瞬間、両手に干将・莫耶を投影し全力で投擲する。

——驚くほどに呆気なく、サーヴァントらしき黒い影を貫き灰塵に還してしまった。

「なんじゃ…。」

本日二度目となる青年のため息が吐き出された。

——襲われていた彼らの話を聞いていて分かったことがいくつ

かある。

一つ この場所は特異点と呼ばれる場所であり、本来は存在しない歴史であること。

二つ 彼ら（藤丸立香、マシユ・キリエライト、オルガマリー・アニムスファイア）は、この場所のように存在しないはずの歴史を修正するために来たこと。

三つ 先程のサーヴァントらしきものはサーヴァントではあるものの、本来持っている力には遠く及ばないということ。

そして四つ 発生した特異点を修正しなければ人理が焼却され、人の歴史は終わりを告げること。

「つまり、特異点とやらを修正しないと世界は終わりってことですか
そうですか…。」

なんてものに巻き込まれてるんですかねえ、俺は…。

と物思いに耽っていた訳だが、藤丸が何か言いたそうにしていることに気付く。

「どうした？」

ずっと見られているのも困るのでとりあえず聞いてみる。

少し言いつらそうにしていた藤丸だったが、一呼吸してから口を開く。

「そろそろ君の名前を教えてくださいませんか？ずっと君って呼ぶのもやりにくいしさ。」

「…。」

ああ、伝えるの忘れてた。

数秒してから咳払いを一つ、自身の名を伝える。

「ああ、悪かったな。俺は衛宮、衛宮誠だ。」

——ここから、物語の歯車は回りだす。

これはまだ、序章に過ぎないのだから——

第3話

「俺は衛宮、衛宮誠だ。」

簡単な自己紹介をすませ、情報の礼として携帯していた食料を少しばかり分ける。

最初は受け取れないと渋っていた彼らも、

「受け取らなければ捨てるだけだ。」

と伝えると受け取らざるを得なかったようだ。

厄介なことになった——

黒い影のようなサーヴァント——シャドウサーヴァントと呼ぶことにする——が一騎接近しているらしい。(予想以上に弱かったが)

近づかなければほぼ感知出来ない俺とは違い、優秀なサポーターがいて羨ましい限りである。

「さて、こういう場合どうするべきだと思うよ、藤丸。」

「ここにいるメンバーで、シャドウサーヴァントとまともに戦えるのは…衛宮だけだ。」

慌てる様子が見れるかと思ひ藤丸に振ってみただけだったのだが、

「——ほう、つまりお前は自分のサーヴァントを信用していない、と？」

少しばかり聞き捨てならないことを言いやがった。

「い、いや、そういうつもりで言ったわけじゃ…!？」

藤丸の言葉を聞いた瞬間、マシユが泣きそうな顔をしていたのを俺は確かに見た。

「今のお前の言葉を聞いて、お前のサーヴァントは——マシユは何を思ったんだらうな？」

「…。」

「そ、それは…。」

自分の仲間を信じられないのは三流以下だ。
あまり、愉快的気分ではない。

「戦えないならいいさ。後は、俺がやる。」

——彼らが戦うことが出来ないのなら、彼らが戦わなくても済むように俺が全て片付けてやる。

大橋の下、俺はシャドウサーヴァントと対峙していた。

「見ツケタゾ、漂流者ア！」

「ランサーか…。」

槍を携えた大男、真名は不明、干将・莫耶を投影し油断なく構える。
「本来なら俺が英霊に敵う通りはない。」

当然だ。究極の一を極めた存在に、投影しか能のない半端者が勝てる筈はないのだ。

師匠は別格だけど——と心の中で呟き、苦笑する。

「だが、今は貴様も半端者だ。勝てない通りはないだろうか？」

「ホザケー！」

そう叫ぶと、一直線に突っ込んでくる。

突き出された槍を干将で受け流し、体制を崩したランサーに莫耶で切りかかる。

しかし、即座に体勢を立て直し回避される。

「ドウシタ、ソノ程度カ！」

「腐っても英霊ということか。ならこれはどうだ？」

魔術行使の文言^{キョウマツ}を告げる。

「——I am the born of my sword…」

干将・莫耶オーバーエッジ！」

それと同時に干将・莫耶に変化が起こる。

鳥の羽のようにリーチが伸び、鋭さが増す。

「一撃で決めてやる。」

「オオオオオ！」

誠の技に触発されたのか、雄叫びを上げ突撃してくる。
——一瞬、槍と双剣が拮抗し、双剣が槍ごと敵を切り裂いた。

第4話

振り抜いた双剣が槍ごとランサーを切り裂く。

その一撃で霊基に致命的な傷を負ったのか、俯いたまま消えていくランサーだったが――

完全に消滅する寸前、その口元が見えた。

ランサーは――

嗤っていた。

ゾクリ、と背後に悪寒が走る。

直感に従い、即座に離脱しようとして動き出したのだが、遅かった。

その直後、背後に現れたサーヴァントに背中を切り裂かれる。

否、いきなり現れたのではなく、元から近くに潜んでいたのだろう。

気付けなかった。簡単に言ってしまうえば油断していただけだ。

「が、ア…!?!」

元々狙われていたであろう首に当たらなかったのは幸運だった。

だが、どれだけ強かろうと、誠は人間だ。

それだけに、今の一撃は致命的だった。

「ア、アサ、シン…!」

「甘い、甘いゾ。イツカラ敵ガ一人ダト思ツテイタ?」

「ぐ、くそお…!」

悔しさが込み上げてくるが、そんなことを考える暇すらなく追撃が来る。

咄嗟に干将・莫邪を盾にして防ごうとするが、力なく添えられただけの剣で防げるほどサーヴァントの攻撃は甘くなかった。

剣は弾き飛ばされて消滅し、誠自身も直撃は免れたものの、大きく吹き飛ばされ壁に激突する。

「が、あ…。」

肺の中の空気が吐き出され目の前が真っ暗になる。

苦しい、呼吸が出来ない。

激しい痛みで視界が歪み、意識が飛びそうになる。

ふと、脳裏に褐色の白い髪の男の姿が映る。

その男は皮肉気な表情を浮かべ口を開く。

——諦めるのか？ここで倒れたら、誰がこのアサシンと戦う？

その言葉を聞きふと蘇るのは、最後に別れた藤丸たちの姿である。
まだだ、まだ力が入る。

「ム？」

「俺、は……」

魔力も問題なく使える。

——ならば貴様はどうする？

「俺は……負けられないんだ!!!」

己の心からの叫びとともに、力を振り絞って立ち上がる。

——フツ、そうか。なら少しだけ、力を貸してやろう。

師匠からもらったお守りが光を放つ。

「ソノ光ハ……!？」

中に入っていたのは——

「これは……？何かの欠片と、カード？」

黄金に輝く欠片と、弓を射る人が描かれたカードの二つ。

手に取った途端、先程の男の声とは違う、どこか機械的な声が聞こえてくる。

——貴様は、何を望む？

「戦う力を。」

——何のために戦う？

「守るため、救うために。」

——その願い、聞き届けた。

最後にその言葉が聞こえた瞬間、黄金の欠片から凄まじい光が迸る。

光が収まる。欠片は消え、代わりにカードケースのようなものが腕に装着されているのが確認できた。

何故かは知らないが、使い方は理解できている。

「さて、反撃開始だ。覚悟しろよ？」

第5話

「さて、反撃開始だ。覚悟しろよ？」

「キサマア!!」

——キーワード 文言を告げるがよい。

「サセヌゾオオオ！」

どこか焦ったように飛び掛かってくるアサシンを躲し、逆に蹴り飛ばす。

「——ここに誓いを告げる。

我が呼び声に答えし英霊よ。

汝の身は我が下に、我は全ての信を置いてこの命を預けよう。

いざ、いざ、いざ！

抑止の輪より君臨し、秩序を正す標となれ——！」

カードホルダーからカードを引く。

カードは——

金のアーチャー。

光に包まれる。

——やはり私か。やれやれ、チュートリアルということかね、全く…。

脳内に響く声は先程の男のもの。

——呼ばれたからには力を貸そう。理想に押し潰されるなよ？

「そこらの管理は任せるよ。何せ、全ての信を置いているんだからや。」

——フツ、その期待に応えられるよう、貴様の命を預かろう！

光が収まる。

体制を崩していたアサシンだったが、すぐさま次の行動に移ろうと振り向く。

そして、こちらの姿を見て驚愕する。

「ナ、ナンダ。ソノ姿ハ!」

「なに、気にすることはないさ。貴様にとつては些細なことだろう?」

元より少しばかり黒くなった体に赤いコートを纏った姿、

「そうは思わないかアサシン——ハサン・サツバーハ?」

以前と変わらない黒髪の誠が、そこに立っていた。

「キ、サマハ…!キサマハ何者ダ!」

「俺か?俺は…。」

ゆつくりとアサシンに向かって歩き出す。

「ク、クルナ!」

「衛宮誠、別世界の衛宮士郎を師に持つ者だ。」

そう言つて、振り抜いた干将・莫耶を消し、振り返った。

「まあ、もう聞こえていないだろうがな。」

霊基を両断されたアサシンが塵となって消えていく。

「…ところで、これってどうやって解くんだろ?」

——私が知るはずないだろう。

《??side》

「ライダー、ランサー、アサシンが落ちたか。例え、私だけになつたとしても、必ず…。」

第6話

進む——

赤いコートを身に纏った男は、群がるスケルトンたち（稀にキメラ）を薙ぎ払い、進み続ける。

「ふう、いい加減スケルトンにも飽きてきたな……。」

——仕方なからう。根本を解決しなければ湧き続けるパターンだろう、所謂無限湧きというやつだな。

「そうは言っても、この特異点を成り立たせている要因が分からないと解決しようがないんだよなあ……。」

なにか知らないのか、と言外に問いかけてみる。

——まあ、心当たりはあるが……。

「だよなあ、あるわけ……え？あるの？」

希望的観測でしかなかったのだが、思わぬ返答が返ってきた。

——ここには多少縁があつてな。

「へえ、そうなのか。それで、その心当たりっていうのはなんなんだ？」

——大聖杯だ。

「大聖杯？聖杯とは違うのか？」

——大聖杯とは、聖杯を君臨させるためにこの冬木の地に流れる霊脈を利用する術式のことだ。特異点とは、一種の固有結界のようなものだ。大聖杯の魔力で維持されていると考えるのが妥当だと思うぞ。

「つまり、今はその大聖杯を目指して進んでいるってことか。」

——そういうことだ。さて、大聖杯の前にもう一仕事あるようだぞ。

それと同時に、サーヴァントらしき魔力が接近してくるのを感じた。

「この魔力量、並のサーヴァントじゃない！」

即座に白と黒の双剣を構え——即座に飛びのいた。

その直後——

弓を構え、ある宝具を投影する。

「——『偽^カ・螺旋^{ラド}剣^{ポル}Ⅱ^グ』！」

放たれるは空間をも貫く無敵の徹甲弾。

——そして、振じれた刀身がヘラクレスの体を吹き飛ばした。

第7話

「はあっ、はあっ…。宝具投影に魔力を使いすぎたか、休まないとし厳しいな…。」

——バ——ノ——やく離——ろ、そい——は！

魔力を多用したためか、アーチャーの声が聞こえにくい。

「なんだって？まあいいか…。藤丸たちが出くわさなくてよかったな。」

藤丸たちが見つかったら間違いなくやられていた、それほどの強敵だったのだ。

「さて、早いこと離れないとな。」

重い体を引きずって離れようと踵を返した瞬間、背後が爆ぜた。

「なんだ!？」

咄嗟に体を捻り、飛んできた破片を回避するが、視界に映ったものに言葉を失う。

「おいおい、嘘、だろ?」

——だから待てと言っただろう!あれは簡単に殺せる相手ではない、今すぐに撤退しろ!

「■■■■■■——!!!」

「っ?!熾天覆う七つの円環!」

凄まじい力で投げつけられた斧剣を、咄嗟に熾天覆う七つの円環で弾く、が——

「ま、りよくが…。」

魔力の大幅な消耗により、視界が歪む。

——馬鹿者!意識を保て、ここで意識を飛ばせば死ぬぞ!

「わ、かって…。ぐああっ!？」

そして、その隙を見逃す狂戦士ではなかった。

斧剣の一撃をもろに喰らい、瓦礫に叩きつけられる。

——誠!？」

「なんとか、生きてる…。」

——ちなみに、先程の防御で魔力がほぼ空になっているぞ。英霊

化も保てない、解除する。

その言葉を最後に、反応が返ってこなくなった。

「……………え。」

「■■■■——?」

敵にも心配される始末である。

《カルデア side》

誠がヘラクレスと戦い始めて少しした頃——

「聞こえたかマシユ!?」

「はい、聞こえました!」

「きつと衛宮が戦ってるんだ。急がないと!」

藤丸たちは——走っていた。

「ちよつと、どこにいくつもりよ!」

途中で合流したキャスターが話し出す。

「おいおいおい、俺はオススメしないぜ?なんせそいつが戦っている相手はバーサーカーだろうしな。」

「バーサーカー?確かに狂化してステータスは上昇している筈だけど、そこまで驚異になる存在では…。」

「奴の真名はヘラクレス、大英雄ヘラクレスだ。」

「ヘラクレスですつて!?(誠視点で記載済みなので以下略)」

「ああそうだ。奴と戦ったことのあるやつしか知らんだろうがな、奴はとてつもなく厄介な宝具を持ってやがんだ。」

「宝具?」

「十二の試練つてやつでな。Aランク以上の攻撃しか通用しない上に、一度殺した攻撃は効かなくなる。奴を殺すなら十二種類の宝具を用意しなければならぬ、とまで言われてるぜ。」

「走りながらも説明していただき、ありがとうございます!ですが、それはつまり、倒す手段が無いと言うことなのでは!」

「おう、普通なら殺すことなんざ出来ねえよ。だから行くのはオススメ出来ねえ。…んで、どうすんだ」

「早く行かないと(行きましよう)——!」

「…全く、甘いマスターだぜ。なら急ぐぞ！」

「了解(です)！」

「…どうしてこうなったのかしら。」

《カルデア side out》

第8話

《カルデアside》

「そういえば、さつき遭遇したアーチャーだけど、なんで攻撃してこなかったんだろう?」

「そうですね、キャスターさんとはお知り合いのようでしたけど…?」

「…さあな、あいつことなんざ知らねえよ。」

——現在に戻る。

《誠side》

「■■■■—!」

先程、一瞬だけ心配するような素振りを見せていたヘラクレスだったが、今は誠に止めを刺すべく行動を開始しようとしていた。

(くそっ!どうする、どうすればこの状況を打破出来る…。出来ることと言えば投影か夢幻召喚インストールの二つだけ…。)

自身が取れる行動について考える。

(まず夢幻召喚はダメだ。アーチャーとは音信不通のままだし、他の英霊を呼ぼうにも魔力が底を尽してる。投影も同じだ。今の魔力じゃ干将・莫耶の投影で手一杯だ、これじゃあ意味がない…。)

そして気付けば、ヘラクレスは目前に迫っていた。

「しまっ!」

■■■■—!!!

さらに振り下ろされる一撃に、なすすべなく弾き飛ばされる。

なんとか直撃は避けたもののその威力は絶大で、血を吐き地面に倒れ伏す。

「い、ふ…。」

止めを指そうとヘラクレスが突っ込んでくる。

その様子をぼんやりと眺めながら、

(ああ、ここで死ぬのか…。死ぬ瞬間はゆっくりに見えるって本当だったんだなあ。)

などと考える。

ふと、冬木で過ごしていた時のことを思い出す。

(師匠や凜さん、ルヴィアさんには、いろんなことを教えてもらったなあ。ま、あの人たちなら俺がいなくても元気にやっつけていけるだろうけどな。)

師匠―衛宮士郎には今の基礎となる投影と家事全般を、凜やルヴィアには魔術を叩き込まれた。

――ヘラクレスが斧剣を振りかぶる。

(クロ、美遊――イリヤは、あの娘たちは悲しんでくれるかな。)

突然現れた得体の知れない誠に対し、よく懐いてくれた少女たちのことを思うと、少し悲しくなる。

「せめて、お別れくらいは言っておきたかったなあ…。」

――迫るヘラクレスの斧剣。

そうつと目を閉じ、来るであろう痛みを待つ。

だが、痛みは訪れることなく――

「砲射!」
フォイア・シュート

「偽・偽・螺旋剣!」
カラドボルグ

「■■■■!?!」

聞き覚えのある声と、バーサーカー重いものが吹き飛ぶ音に耳を疑った。

「――え?」

「二大丈夫(ですか)、おにいちゃん誠さん!?!」

「な、なんで君たちがここに…?というか、その格好は一体…。」

――そこには、いかにも魔法少女、といった服装の少女と、イリヤと美遊自身
が先程まで着ていたものに似た服をきた少女が立っていた。

《カルデア side》

「まだ着かないの!?!」

「もう少しです、所長!」

「間に合え…!」

「あと少しだ、悩んだりする前に足動かせ!」

――藤丸たちが合流するのは、まだ少し先である。

第9話

「二………大丈夫（ですか）、誠おにいちゃんさん!？」

「あ、ああ、なんとかな。助かったよ。」

（…触れられたくないんだろうなあ。）

イリヤたちからの圧力で、服装について触れられたくないのだろう。と理解は出来た。助かったのも事実だ。

——だが、ある疑問が浮かび上がる。

「なぜ、君たちがここに…?」

彼女たちは別の世界の住人だった。

確かに、小聖杯の機能を有してはいるが、それだけで世界は越えられない。

誠のようなイレギュラーは除くが。

「それが…。」

「分つかんないのよねえ。私たちは、おにいちゃんの姿が見えないから探してただけだったし。」

「誠さんを見つけて近付いたら、急に目眩がして…。気付いたら誠さんが襲われてて。」

「…そうか。」

恐らくだが、この少女たちは誠の空間転移に巻き込まれたのだろう。

（つまりは、俺のせいだ。俺がこの娘たちを巻き込んでしまったんだ。）

——誠の空間転移は特殊である。自らの意思に関係なく、ある日突然に起こりうるのだ。

「というか、何があったの?こんなにボロボロになってるし…。」

「ああ、それは—」

イリヤの質問に答えようと口を開くが、

「——。」

今の一撃で命を一つ削れていたらしく、バーサーカーの蘇生が開始されていることに気付く。

「っ！あんまり時間はなさそうだ、なんとかこの場を切り抜けないと…。」

同時に、イリヤたちも敵の姿を再度認識したようで――

「やっぱりアレって…。」

「バーサーカー、よね？」

「でも、前に戦った黒化英霊よりも弱体化してるような…。」

冷静に分析し始めた。

「どうやらこの娘たちは戦い慣れしているだけでなく、普通ではありえない戦闘経験があるようだ。」

「どういうことかは後で詳しく聞かせてもらおうとして、だ。この状況、どうする？ちなみに、俺の魔力はもう空っぽだ。ほとんど何もできない。しない。」

「ええ!?ど、どうしよう…。勢いで来ちゃったけど、今カード持ってないよ!?!」

「カードって何だ？」

「かつての英雄たちの力を宿したマジックアイテムです。このカレイドステッキで力を引き出すことで、英雄の力を借りることができるようになるんです。私たちはクラスカードと呼んでいます。」

と、美遊が説明してくれる。

「なるほど、そのステッキは魔術礼装なのか。それに、クラスカードか…。」

『ザッツライトですよー!このルビーちゃんも妹のサファイアちゃんのおかげで、可憐な魔法少女たちは更なる力を得るのです!』

――なんか、ステッキが喋った。

第10話

「うん…。最近の魔術礼装はしゃべるんだなあ。」

「ああっ!? 誠さんが混乱してる!」

「そりやそうよねえ…。本来なら意思を持って話すステツキなんてありえないもの。」

クロの言う通りである。

音を発生させる魔術礼装は存在するが、自らの意思を持って行動・発言する魔術礼装なんてものは、もはや魔法の領域なのだ。

「誠さん、大丈夫ですか?」

「…はっ!? え? ああ、大丈夫、大丈夫。心配してくれてありがとうな。心配そうにこちらを見ている美遊の頭をなでながら、軽く微笑んでお礼を言う。」

「ひゃっ、あの、その…。」

何故か顔を俯かせてしまった。

「あ、ごめん。驚かせちゃったか。」

「い、いえ。もう少し…。」

「…羨ましいー!」

「?」

何故か羨ましがられた。イリヤたちも美遊を撫でたかったのだからか?

『姉さん、これは…。』

『いやあ、なかなかの朴概念ですねえ。イリヤさんをいじるネタが増えました♪』

「はあ…? あんまりイリヤたちをいじめてくれるなよ?」

『わかってますよお。イリヤさんが本気で嫌がることを、このルビーちゃんがするわけないじゃないですか!』

どうだかなあ…。などと軽口をたたくことで緊張感は紛れた。

そして、タイミングを見計らったように、ヘラクレスの蘇生が終わる。

「■■■■—↓」

再度咆哮を上げ、己の命のストックを減らした相手に目を向けた。
「来るか!？」

なけなしの魔力をかき集めて干将莫邪を投影、即座に動けるように
体勢を整える。

——だが、ヘラクレスの視線がイリヤに向いた瞬間。

自由意志のないバーサーカーであるヘラクレスが、明らかな動揺を
見せた。

「ああ…。」

そして、

「生きていてくれて、ありがとう。」

と慈しむような顔で呟いた。

「■■■■■■——!!!」

その後ヘラクレスは大きな声で咆哮し、崩れた街の中に消えていっ
た。

ヘラクレスが去ったため、一度休息をとることにする。

「あのヘラクレス、イリヤのことを認識して…? いや、まさか、な。」
思考を奪われているバーサーカー、かつ戦闘しか考えられない黒化
サーヴァント状態だったにも関わらず、意思を伝えて見せたヘラクレ
ス。

その理由に、一つだけ心当たりがある。以前別の師匠衛宮士郎に聞いた話
に、イリヤがバーサーカーのマスターだったというものがあった。

その話の中では、ヘラクレスはイリヤを守ることができず、イリヤ
が殺されてしまった。

——もし、この世界がその世界線と似たものであったなら。ヘラ
クレスのあの行動にも納得がいった。あの大英雄はずっと、イリヤを
大切に思ってきたのだろう。

だが、それを誠の口から語ることはない。己の胸に秘めておくべき
ことなのだろうと感じた。

まあ、ヘラクレスとともに戦うようなことがあれば話は別なのだけ
れど。

第11話

思考を打ち切り、体を休めることに集中する。

すると、同じように休んでいたクロが話しかけてきた。

「ねえ、おにいちゃん。さつきカードについて聞いたとき、心当たりありそうな感じだったけど。」

「心当たりというか、持ってるというか…。」

恐らくは、弓兵が描かれたあのカードのことだろう。

「これのことだろ？」

一度使ったカードを取り出して見せると、

「アーチャーのクラスカード!？」

「嘘!？」

美遊とイリヤは驚いていたのだが、クロだけはなぜか納得したように

「やっぱり…。なんか違和感あったのよねえ。」

と呟く。

「ど、どういうこと? なにか知ってるのクロ?」

「そのカードに宿っている英霊、私の中にあるカードと同じ英霊なのよ。」

「同じ?」

「恐らくは衛宮士郎お兄ちゃんの可能性の一つ。英霊エミヤってところかしらね。」

「二師匠(お兄ちゃん)の!？」

「ま、そんなことはどうでもいいのよ。問題は、なぜ私の中にあるはずのカードをおにいちゃんが持っているのか、ってところよ。」

割と重大な事実だったはずなのだが、軽く流されてしまった。

「そうだ、クロは大丈夫なの!？体に異常はないの!？」

クロに近づき、顔をペタペタと触るイリヤ。

「ちよ、そんなに慌てなくても大丈夫よ。だって、カードはちやんとここに

にあるもの。」

「ほえ？」

そして、まったく理解できずにいるイリヤ。

「多分、クロが言ってるのは…。」

それを見かねてか途中から黙っていた美遊が説明してくれた。

同じ英霊が宿ったカードが二枚存在することはあり得ないのだ、と。

「な、なるほど。」

『まったく理解できてなさそうですねえ。…ま、イリヤさんですしねえ。』

「ちよっと?!私だからってなに?!」

『そのまんまの意味ですよお♪』

ウガー!とルビーを追い掛け回すイリヤを背景に、

「わかりやすく言えばドツペルゲンガーとかかしら。まあ、出会ったら即サヨウナラなんて物騒なことは起こらないからいいけど、力が出にくいっていうのも確かなのよねえ。」

とぼやくクロであった。

〈(たまに出てくる)カルデアside〉

誠たちが合流する少し前——

誠の救援に向かうべく駆けていた藤丸達だったが、

「——止まれ。」

キヤスターの制止により歩みを止める。

「どうしたんですかキヤスターさん、早く行かないと誠が!」

「いえ、センパイ。誠さんのことが心配なのは私も同じですが——
下がって!」

「え…うわっ!?!」

マシユに腕を引つ張られ地面に倒れる。

倒れた藤丸の頭部を掠め、黒い剣線が飛んでいく。

「——そこか!」

キヤスターの放った炎が崩れた瓦礫を吹き飛ばす。
だが、

「なにも、いない？」

「いや坊主……。後ろだ！」

言われるがままに振り向く。

——そこには、悪夢がいた。

元はきれいだったであろう金髪はくすみ、黒く染まった鎧と剣を身に着けた漆黒の騎士。

「……」

かつて騎士王と呼ばれた、サーヴァントとしては最高峰とまで言われた最優の騎士——

アーサー・ペンドラゴンが反転した存在が、藤丸たちの前に立ちただかった。

第12話

黒い風が周囲を凧ぎ払う。

圧倒的な力が振るわれる度、周囲は更地になっていく。

堕ちた騎士王——アルトリアオルタと呼ぶことにする——の剣線は藤丸たちを確実に追い詰めていた。

「おいおい、洒落にならねえぞ……！」

戦況はかなり悪い。

以前対峙した時以上の力を、アルトリアオルタが発揮していたためだ。

クーフリーンとしても、以前が全力だったとは思っていなかった。だが、それを踏まえてこちらも勝てるかと判断した戦力を揃えていたのだ。

——にも関わらず、実際に戦ってみればこの様だ。

一方的に攻められ、防戦一方の状態が続いていた。

「くっ、うあっ!？」

盾で剣を防ぎ続けるマシユも限界が近い。

何度も地面に叩きつけられ、その度に立ち上がり耐え続けている。

クーフリーンは考える。

(どうする、一か八かで宝具を使うか？だが、あの嬢ちゃんだけじゃ魔力が溜まるまで持たねえ。くそっ、手が足りねえ!)

クーフリーンもただ眺めていた訳ではなく、キャスターとして召喚される大きな理由であったルーン魔術で援護していたのだが、アルトリアオルタが有する対魔力と全身を包む魔力により決定打を与えることが出来ないでいた。

(せめてランサーのクラスで召喚されてりゃあ、もうちよいやりようもあつたんだが……)

「あっ!？」

再度マシユが吹き飛ばされ、藤丸の足元まで転がってきた。

「マシユっ!？」

「う……。」

それでも、盾を支えにして立ち上がるとする。

「貴様らは弱い、弱すぎる。それではこの先…。」

終始無言だったアルトリアオルタが口を開く。

「へえ、あんた喋れたのか。ずっと無言だったからただの人形かと思ってたぜ。」

「話す必要がなかっただけのことだ。そして、もう遊びは終わりだ。」
「っ!？」

アルトリアオルタが話し終えた瞬間、とてつもない魔力の高まりを全員が感じ取った。

漆黒の魔力がアルトリアオルタの構える聖剣に集まっていく。

「そんな、宝具ですって!？」

オルガマリーの驚愕の声が響く。

「宝具!? そんなの、あれしか…!」

この場で宝具を防ぐ手段は一つしかなかった。

クーフリーンとの訓練で身に着け、マシユが己自身を確立させるにいたった宝具。

「…やれるか、嬢ちゃん。」

「——やれます!」

「よし分かった。なら、あいつは何とかしてやる。」

それだけ言うと、クーフリーンは魔力を高めることに専念する。

「作戦会議は終わったか? ならば死をくれてやろう。」

聖剣に集まっていた魔力が解放される。

「『卑王鉄槌』極光は反転する。光を呑め…! 『約束された勝利の剣』」

「マシユ・キリエライト…。行きます! —— 仮想宝具

『ロード・カルデアの基礎』」

放たれた極光と展開された大盾が鬨ぎ合う。

「やああああああああ!!」

マシユに叫びに応え、拮抗し耐えていた大盾だったが、

「…はああ!」

アルトリアオルタから放たれていた極光が威力を増したことによ
り、一気に押し込まれる。

「そ、んな…!?!」

盾ごと押し込まれて、今にも倒れてしまいそうになっている。

圧倒的な実力差を見せつけられ、マシユの体も心も、既に限界を迎えていた。

「マシユっ!」

堪え切れずマシユの元へ駆け寄ろうとした藤丸だったが、オルガマリーの言葉に足が止まる。

「待ちなさい藤丸、貴方が行ってどうするの!?!」

「で、でも!」

「貴方はマシユを、自分のサーヴァントを信じられないの!?!」

その言葉を聞き思い出したのは誠に言われた言葉だ。

『——ほう、つまりお前は自分のサーヴァントを信用していない、と?』

あの時見たマシユの表情は、深い悲しみに染まっていた。

——それでも、今は自分のような不甲斐ないマスターの力になりたい、と宝具まで解放してくれた。

(そんなマシユを信じられない訳ないじゃないか!)

間違いなく、藤丸の中で何かが変わった。

「マシユ、頑張れ!君なら、きつとやれるって信じてる!」

「——はい!マシユ・キリエライト、センパイの信頼に伝えて見せます!」

仮想宝具 擬似展開ロード／人理デアスの礎——

その元になった宝具は、使用者の信念ひが折れぬ限り全ての災厄から守り抜いたという。

マシユの想いは、アルトリアオルタにも打ち勝った。

極光は弾け飛ぶ。

「…ほう?」

「今だ(です)!」

そしてその隙を見逃すほど、クーフリーンは甘くなかった。

「我が魔術は炎の檻、茨の如き緑の巨人。因果応報、人事の厄を清める社——

倒壊するはウィツカー・マン！ オラ、善悪問わず土に還りな——

！
— 焼き尽くせ木々の巨人 『灼き尽くす炎の檻（ウィツカーマン）』！

— 最大までチャージした宝具が、アルトリアオルタに炸裂した。

第13話

凄まじい爆炎が周囲を包んだ。

「うっしや、決まったぜー!」

完璧な手応えだった。

なにしろ全力の宝具だ、仕留めるまではいかなくてもかなりのダメージを負わせることが出来た筈である。

「はあ、はあ…。ど、どうですか…?」

マシユも全力を使い果たしたようで、立つのもやっとという状態である。

「ははは、流石にこれで仕留め切れてなかったらキツイなあ!」

「さ、流石に、終わったよな?」

「大丈夫だとは思うけど…。油断だけはしちゃだめよ?」

警戒を促すオルガマリーもこれなら流石に、と思っていた。

だが、現実是非情である。

「…『卑王鉄槌』極光は反転する。」

和やかになりかけていた空気が凍った。

「光を呑め…!」

「そん、な…。」

「嘘、よね?」

「避けるマスター!!」

「エクスカリバー・モルガン約束された勝利の剣」

再び、極光が放たれた。

〈藤丸視点〉

世界がスローに見える。

こちらへ必死に手を伸ばすマシユ。

絶望したように座りこむオルガマリー。

先程まで見せていた飄々とした雰囲気など一切なく、焦った様子のクーフリーン。

そして、目前に迫る極光。

(ここまで頑張ったっていうのに、これはあんまりじゃないかな…。)
悔しいという思いと、ここまで一緒に戦ってくれた仲間たちに対し、申し訳ないという気持ちが生かんでくる。

(多分、あれだけの威力だし痛みを感じる前に消えちゃうかな…。)
と諦めたように目を閉じた。

だが――

「熾ロ!天覆アう七イつの円環ス!」

藤丸が死ぬことはない。

七枚の花が咲き誇り、極光を押しとどめたからだ。

「……………ああ。」

(きれいだなあ。)

こんな状況で何を考えているんだ、と思う者もいるだろう。

しかし、確かに美しい、きれいだと感じたのだ。

逃げることにすら一瞬忘れてしまうほどに。

花を咲かせた二人のうちの一人――誠が叫ぶ。

「今の内だ!早く藤丸拾って退避しろ!」

「おう、助かったぜ!」

その言葉と同時に、クーフリーンが藤丸を回収して後退する。

「よし、後はこっちでなんとか…。」

「ちよっ、おにいちゃん!?予想以上に厳しいんだけどこれ、完璧に出力負けてる!」

もう一人、誠の隣で熾ロ!天覆アう七イつの円環スと呼ばれた花を維持していた少女――クロが焦ったように叫ぶ。

「嘘だろ!?二人で展開した、完全な熾ロ!天覆アう七イつの円環スだぞ!」

――誠、すまないが次で限界だろう、後は任せた。

「なに!?どういうことだアーチャー!」

――話している余裕はないが、これだけは伝えておく。まだ敵は残っている、油断するな。

「お、おいアーチャー、どういうことだ…!」

そう話している間にも、花卉は一枚、二枚と砕かれていく。

「くそっ…、意味が分からないし予想以上に速いけど、仕方ないか…！」

花卉の六枚目が砕かれた。

「イリヤ、美遊、今だ！」

合図を送ると同時に、クロを抱えてその場から飛び退く。

飛び退いた場所を極光が突き抜けていく。

その瞬間、

「フオイヤ・シユート二砲 射！」

アルトリアオルタの左右を挟み込むように魔力弾が放たれる。

「く…！」

アルトリアオルタも灼き尽くす炎の檻のダメージが大きかったのか、その場から動けず直撃を受ける。

「そのまま抑え込んでくれ！クロ、やるぞ！」

「了解、おにいちゃん！その代わり後であれ、お願いね！」

「分かってるよ…。」

二人同時に矢を番え、放つ。

「カラドボルグ偽・螺旋剣Ⅱ」

「カラドボルグ偽・偽・螺旋剣Ⅲ」

「しまっ!？」

アルトリアオルタが気付いた時には遅く、今度こそその体を地面に沈めることになった。

第14話

「ふう、流石に危なかったな。」

「ほええ、疲れたよお…。」

「そうねえ、完全な熾天覆う七つの円環が砕かれるなんて思ってもみなかったわ。」

「あんなに威力があるなんて思いませんでした。」

クロも誠も、完全な熾天覆う七つの円環を展開することは出来ない。

どちらの力も借り物で、いくら自分のものにしたとしても本物の高みには届きえないのだ。

別々に熾天覆う七つの円環を展開したところで
約束された勝利の剣を防ぐことは不可能である。

ではどうするのか——

答えは簡単、二人で一つの熾天覆う七つの円環を展開すればいい。
少し危ない場面はあったが、結果として助かったのでよしとする。

そういえば、とクロが話し出す。

「まだあれを貰ってないじゃない。」

「あれ？」

イリヤと美遊の疑問の声があがる。

「何の事だ？」

「惚けたって無駄よおにいちちゃん、約束したんだからね。しっかりお願いね。」

「……………分かったよ。」

なんとか誤魔化したかったのだが、クロにジト目で睨まれたことで諦める。

仕方なく、懐から宝石——魔力を貯めておく媒体——を取り出し、クロに指で弾いて渡す。

「んー、美味しい♪」

嬉しそうに頬張っているのでよしとしよう。

…貴重なんだけどなあ。

「ああ、そうだアーチャー、さつき言ってた意味って…。」

何度か呼び掛けるのだが、応答すらしなくなっている。

どころか、先程まで感じていたアーチャーの気配も消えている。

「おいおい…マジか。」

休憩ということで会話や呼び掛けを行っていたのだが、

「あの…。」

「なあ、そろそろいいかい?」

先程まで黙っていた藤丸が待ちきれなかったようで話かけてきた。

「ん、ああ、どうした?」

「坊主のことは聞いているが、そのの嬢ちゃんたちは何者なんだ、さつきはいなかったろ?」

案の定、先程までいなかったイリヤたちに注意が向く。

「イリヤたちのことか…。さつき話したとは思うんだが、俺が違う世界から来たことは伝えたよな?」

「そうだったね。」

「実は、この娘たちもそうなんだ。俺がこつちに来る時に巻き込まれちゃったみたいでさ。」

『跳ぶときに解析をかけてみましたが、どうやら私たちが行っていた鏡面界への空間跳躍とは別物のようですねえ。』

「空間転移は現代では未だ解明されていない部分が多い魔術です。カルデアで使われる予定だったレイシフト、これも空間転移の原理を一部応用しています。」

いくつかの話が続けた後、オルガマリーが話を締める。

「なるほど、大体の事情は分かったわ。まずは特異点の中心に向かいましょう、そこに何かがあるはずよ。」

一同は特異点の中心——大聖杯が眠る地へと進んでいく。

第15話

《??side》

大聖杯が眠る地、特異点の中心に一人の男がある場所を眺めていた。

眺める先では、極光と大盾が鬩ぎ合い、しのぎを削っている。

その男は、物腰柔らかな紳士然とした人物で、モスグリーンのタキシードとシルクハットを着用しにこやかに微笑んでいる。

拮抗していた鬩ぎ合いだったが、ある時を境に大盾が極光を押し戻していく。

それを確認すると、男の顔から微笑みが途絶え、憎悪が溢れ出すかのように表情が歪む。

「オルガマリーだけではなく、あの青年とマシユまで生きているとはね。大した力もないからと見逃してやったというのに、どいつもこいつも統率の取れていないクズばかりだ！」

一通り叫び散らした後、男が藤丸達に向けて掌を向ける。

「これ以上邪魔されても困るんだ。ここであのセイバー共々消し去ってしまうか。」

向けられた掌に魔力が集まっていく。

サーヴァント可したマシユはともかく、到底生身の人間に耐えられる代物ではないだろう。

「全く、余計な手間をとらせてくれた。では、さようなら。」

禍々しい魔力が放たれる。

だが――

「フルンディング
赤原狛犬」

「■■■■――!」

「っ!?!」

その攻撃は藤丸達に届かない。

射撃が魔力を射抜き、斧剣の攻撃が男のいた地面を砕く。

咄嗟に飛び退き、体勢を整えた男が、自身の攻撃を防いだ何者かへと視線を向ける。

「貴様らは…。」

即座に招待を看破した男——レフ・ライノールが怒りを露にする。

「セイバーについてきた負け犬風情が、私の邪魔をするか！」

対峙した二人が不敵な笑みを浮かべる。

「はて、何のことだかわからないな？だが、まあ、堕ちたとは言え元々は正義の味方を名乗っていたものだ、このくらいはさせてもらうさ。」

「■■■■■■■■■■」。

バーサーカーの話す言葉は分からない。だが、言いたいことは伝わったのだろう。

アーチャーが軽く笑みを浮かべて話を続ける。

「まさか貴様と共闘することになるとは…。しかし、利害は一致しているだろうか？あの娘たちの未来のためだ、一肌脱ごうじゃないか。」

「■■■■■■■■■■」

「本当に…。本当にどこまでも私の邪魔をする！そこまで死にたいのなら貴様らから先に殺してやる！」

「やれやれ、品のない奴だ。——行くぞ大英雄、貴様の力を見せてみる！」

「■■■■■■■■■■」

二人の英雄が、それぞれの想いを胸に戦場へ駆ける。

《主人公 side》

「しっかし、お前さんは本当にあいつの力を扱ってんのか？」

「どういうことだ？」

唐突なキャスターの問いに首を傾げる。

「いやな、ちよつとした面識があるんだがな。なんつーかなあ…。」

「煮え切らない言い方だな？」

「ああ…すまねえな、どうにも違和感が拭えねえもんでな。」

また一つ、物語が動こうとしていた——

第16話

切り付け、殴りかかり、叩き潰す。

これを何度繰り返しただろうか——

「チツ！この化け物めが、どんな耐久力してるんだ！」

「ふん、期待なんぞしていなかったが、所詮は騎士王の小間使いか。全く相手にもならん。」

レフの言葉とともに放たれた魔術が、アーチャーとバーサーカーを弾き飛ばす。

「ぐうつ!？」

「■■■■、■■■■！」

「本当にガツカリだ……。もう消えかかっているじゃないか、なあ。さっきまでの威勢はどうしたんだ！」

幾度もの攻撃を受けたため、既に霊基には輝が入っている。

「そつちのデカブツももう限界だろう？せめてもの慈悲だ、今すぐ楽にしてやろう。」

藤丸たちへ放たれようとしていた魔術が、アーチャーたちに向けられる。

「時間稼ぎすらまともに出来んとは……」

「諦めるんだな、散れ。」

そして、放たれる。

だが——

「■■■■、■■■■！」

「つ?!今行ったらいくら貴様でも——」

「無駄な事を、まずはお前から始末してやる。」

何を思ったのか、バーサーカーが突っ込んでいく。

一瞬、バーサーカーがアーチャーへ振り返り、にやりと笑った気がした。

「……………そうか、分かった。」

即座に防御を捨て、霊基が許す限り魔力を溜めていく。

思い描くのは、眼前の大英雄が宝具にまで昇華せしめた技術。

「I am the bone of my sword…」

「■■■■—!!!」

魔術が放たれる。

それを真つ向から受け止め、何度も燃え付きながらも、大英雄は威力を殺しきった。

そして—同時に霊基が砕け散る。

魔術が過ぎたあとに残ったのは、風に乗って消えていく黄金の粒子だけだった。

同時刻—

「イリヤ?どうして泣いてるの…?」

「え?あれ、ほんとだ。何でか分からないけど、悲しい気持ちになってくる…。」

「…………バーサーカーが逝ったか。」

「これ後は君だけだ「油断大敵、という言葉を知っているかな」なにつ!」

「全^{セツ}工程投影完了——ナインライフズ・フレイドワークス是、射殺す百頭!」

「ぐ、おおお…!?!」

放たれるは、神にも届きうる最高峰の九連撃。

霊基を犠牲に放たれた攻撃はレフ・ライノールを間違ひなく捉えた。

「はあつ、はあつ…。流石に、この霊基で放つには、荷が重すぎる代物だったな。」

砕け散った霊基を気力で留め、敵へのダメージを確認しようと顔を上げる。

煙が晴れ

——そこにはなにもなかった。

「そんな…ばか、な…ガツ!?!」

驚愕するアーチャーの胸を背後から伸びた手が貫く。

「今の攻撃だけは誉めてあげよう、この私に傷を付けるとは思わなかったよ。」

「(クソ：後は頼むぞ、誠。)」

アーチャーもまた、黄金の粒子となり消えていく。

「やれやれ、手間を掛けさせてくれた。さて、後はオルガマリーたちだけか。」